

月刊

2012

8
月号

みんぱく

特集
・
座談会

特別展

世界の織機と織物

織って！みて！織りのカラクリ大発見

座談会 | 吉本 忍 × 井関 和代 × 柳 悦州 × 上羽 陽子

コラム | 古川 幹雄 上羽 陽子

夢うつつの内に金環日食を眺めていた時に、ふと、脳裏をかすめた光景がある。

太陽の悲しげな姿は、おびえる大地に鉛のような光を投げかけ、星群の中に赤い松明の火が燃えるのが見られ、驟雨にまじってしばしば血が滴り降ってきた。暁の明星の面も錆色に覆われ、月は血にまみれていた。いたるところで地獄の鳥である梟が凶兆を告げ、また象牙の神像が涙を流すかと思えば、神聖な杜では悲哀のすすり泣きや叫び声が聞こえ、黒雲のなかで武器の音、恐ろしいラッパの響き、天を突く角笛が悪業を予告していた。

古代ローマの文人オウィディウスが『変身物語』で記すカエサル暗殺の凶兆だ。いかに犠牲を捧げてよい兆しは現れないばかりか、古来の肝臓占いをおこなっても変事が近づいていることを告げるばかりであったという。その通り、紀元前四四年三月一五日、カエサルは、元老院の集会所にあてられていたフォロ・ロマーノのクリア・ポムペイアという建物で刺殺された。しかし続けてこの文人は、カエサルの魂はウエヌスによって死体から抜き取られ、天空へと運ばれる途中、燦然と輝いて燃え出し、己自身で天まで駆け上がった。きらめく星になったとして、カエ

プロフィール
國學院大學文学部教授。西洋中世美術史や死の図像学を専門とする。15、16世紀のヨーロッパで広がった図像「死の舞踏」についての研究をライフワークとしている。おもな著作に「死を見つめる美術史」（ポーラ文化研究所、1999年。芸術選奨文部大臣新人賞）、「死の舞踏」への旅——踊る骸骨たちをたずねて（中央公論新社、2010年）、「内蔵の発見——西洋美術における身体とイメージ」（筑摩書房、2011年）など。

千字文

終末の兆し

小池 寿子

サル死後七日目に空に彗星があらわれたことを神話的に記す。そこには、際立った明暗の対比のなかで滅びゆく古代世界の景観がある。

その光景は決して過去のものではなく、天変地異の続く昨今の世の中を映す鏡のようではないか。やがて何が起る、そのような不安と緊迫感、時代は下って一四一〇年前後、都市バリの状況を綴った一市民の日記にもあらわれる。度重なる疫病の蔓延に加え、百年戦争後半に入って骨肉の争いと無政府状態にあったパリを、天変地異が襲う。ある八月の早朝、突然さまざまの雷鳴が轟くと、固い石で丹念に造られていた聖母マリア像は、落雷で真ん中から砕け散って遠くまで飛ばされたという。翌年六月には雷が降り、風が吹き荒れ、雷鳴が轟きわたる。さらに翌年の復活祭には激しく雪が降ってセーヌ河は凍結して小さくなったかと思うと、続く年には大氾濫を起す。物資は運べず、生活は困窮して価格高騰となるものの、パリの城外には追いはぎが徘徊して何人も襲う。一五、一六世紀にヨーロッパを席卷する「死の舞踏」流行前夜のことである。歴史は人々の力によって動くとはいえ、天変地異は、はるかに大きな力で世界の様相を変え、人知を超えた力の存在を、脳天をかちわることく知らしめる。そう実感する昨今である。

月刊
みんなぱく
8月号目次

- 1 エッセイ 千字文
終末の兆し 小池 寿子
- 2 特集 座談会 [特別展] 世界の織機と織物
織って! みて! 織りのカラクリ大発見
出席者 吉本 忍
井関 和代
柳 悦州
上羽 陽子
- 6 すべてはタテ糸から始まった! 古川 幹雄
- 8 触ってみる! 感じてみる!
——織物再発見 上羽 陽子
- 10 研究フォーラム
「身分証明書」は「わたし」を証明できるのか
陳 天璽
- 12 みんなぱく Information
- 14 企画展関連写真展のご案内
写真展 「写真で見る東日本大震災と被災文化遺産のレスキュー」
から企画展 「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」へ
日高 真吾
- 16 地球ミュージアム紀行
入場無料からみえてくるもの
レバノン・サイダ旧市街の博物館群
菅瀬 晶子
- 18 多文化をあきなう
社会を変えたくて——アマチュアの「あきない」の素顔
佐々木 玲子
- 20 異聞逸聞
エチオピア、アムハラ人の本音と建前
川瀬 慈
- 21 みんなぱく私の逸品
モンのスカート
宮脇 千絵
- 22 フィールドで考える
アポリジニ研究始め
小山 修三
- 24 次号予告・編集後記

特集
座談会

特別展

世界の織機と織物

織って！みて！織りのカラクリ大発見

会期 9月13日(木)～11月27日(火)
場所 国立民族学博物館 特別展示館

われわれの生活に当たり前のように存在し、利用されている織物。機械によつて織られた布が大量生産される一方、現在においても世界中で、人のからだや手を用いて布が織られている。特別展実行委員長の吉本忍教授をはじめとする4名の実行委員が、織りとの出会いや、共同研究で発見したこと、特別展にかける思いなどを語る。

手仕事とカラクリの世界へ

まもなく特別展「世界の織機と織物」——織って！みて！織りのカラクリ大発見——が開幕します。まずは、なぜ今「織機と織物」なのでしょう。

吉本 今回の特別展は、民博の共同研究「手織機と織物の通文化的研究」がベースとなつています。各メンバーによる研究成果をもとに、織機とそれらから生みだされる織物を展示し、各地域で継承されてきた織りの技術を紹介します。

織物は、衣類をはじめとして暮らしに欠かすことのできない必需品です。だからこそ、織りの技術は、世界中のあらゆる地域で継承されてきました。また、産業革命や、コンピュータの出現によってひきおこされたIT革命も、織りの技術の延長線上にあります。織りの技術はまさに人類の中枢技術のひとつであると位置づけることができます。

ところが産業革命以降、人類は生産性、利便性を求めるあまり、織りをはじめとする手仕事を放棄し続けて、今にいたります。先祖代々、長い年月をかけて積み重ねてきた知恵の集積を、われわれの時代で手放してしまつてよいものだろうか。今一度生活を見つめ直そう、手仕事へ回帰しよう、そんなメッセージもこめて、展



村の共同作業場で糸づくりや機織りをするアトニの女性たち。インドネシア、ヌサ・テンガラ・ティムール州(ティモール島ボティ村)(撮影・吉本 忍)



天然染料で染められた本綿の手紡ぎ糸を使用したアトニの腰機による機織り。インドネシア、ヌサ・テンガラ・ティムール州(ティモール島ボティ村)(撮影・吉本 忍)



よしもと しんのぶ
吉本 忍
民博 民族文化研究部



いせき かずよ
井関 和代
大阪芸術大学教授



やなぎ よしくに
柳 悦州
沖縄県立芸術大学教授



うえば ようこ
上羽 陽子
民博 文化資源研究センター

写真キャンペーン中の織機の名称や分類は、吉本忍の定義による。

覧会の準備をすすめています。

わたし自身は、呉服屋の息子として育ち、産まれたときから身の回りに染織品がありました。その後京都市立芸術大学の染織科で学び、創作活動もおこないました。その一方でインドネシアで緋織物の調査をはじめ、それ以来世界中の染織技術とかわわってきました。そして今もなお「織物とは何か」「そのカラクリはどうなっているのか」ということに関心を持ち、調査を続けています。

井関 織物とのかかわりという点でいうと、学生時代、絵を描きたくて奄美大島を訪ねたときの経験が忘れられません。自ら蚕を育てて糸をとり、育てた藍で色を染めて、緋を織っている年配の女性に出会いました。それまで、わたしは人から評価を受けるための作品をつくる、という教育を受けていたので、そこで、織り上がったものをどうするのかとたずねました。すると、「息子に送る」という返事がかえってきました。当たり前のことかもしれないが、評価を求めないモノづくりがあることに気づかされ、大変な衝撃を受けました。それと、現場に足を運ぶようになったきっかけは、



クバの杭機。斜めに張ったタテ糸の下で、機織りをするクバの織師。コンゴ(旧ザイール・カサイ州)(撮影・井関和代)

実際に手仕事に触れる機会があり、現在に至っています。ところが、一般的にいうと、そんな機会は極端に減ってしまっている。だからこそ、今回の展示ではモノをみるだけでなく、織物ができるまでのカラクリを実際に体験することで理解を促したいと考えています。そうしたことから、展示場内には体験コーナーを設け特別展の関連イベントとして、ワークショップもおこなう予定です。体験を通して、手仕事の世界とその背景にある人の暮らしに関心を深めてもらえればと期待しています。

「目利き」の収集品が集まる共同研究

みなさんはそれぞれ専門とされる地域や調査対象をおもちです。共同研究と個々の研究とを比較した場合、共同研究で得られるものは何なのでしょうか。

吉本 ひとりでは集めきれない情報を集約できるということがあります。

織機についていえば、タテ糸を張るというカラクリや、タテ糸にヨコ糸を組み合わせるというカラクリなどをはじめとさまざまなカラクリがありますし、織物であれば糸や染料、織り方なども地域によって千差万別です。

メンバーはみな、世界各地にフィールドをもち、織りの現場で調査をしている人ばかりですから、多様な一次資料を集約することができます。

井関 共同研究に参加する各メンバーの専門とするフィールドも、うまくわかれていきます。完全に

ある展覧会です。当時、多くの展覧会は、「謎」「幻の〜」という非常にロマンに満ちたキーワードでまとめられるものが多かったですね。それについて単に「不明」であるのにそう書かない(笑)。でもそんなことはない、現地に足を運ばなければいけません。

井関 僕の場合は、親が織物を織っていて、家に工房もありました。子どものころから機の上に巣をつくって遊ぶように育ったので、自然と自分も織物を勉強しようと思うようになり、大学では織りのメカニズムについて勉強をしました。卒業後、緋の研究をしたと思うのですが、その後、ラオスに行く機会があったのですが、そこでは養蚕も天然染料も普通にのこっているし、複雑な織り技術をいとも簡単にこなせるような機師の工夫を垣間みたりして、一気にのめりこみました。それで降ラオスの織物を中心に調査を続けています。

上羽 染織をはじめて学んだのは、大学生のときです。授業のなかで正倉院の布を復元するとかインド更紗やジャワ更紗、西アフリカの泥染めの技術などを実践的に学びました。四年生のときには、インドに赴き、現在調査を続けているラバリーという人たちに会いました。最初は女性の刺繍布や衣装に興味をもっていたのですが、男性がラクダやヤギの毛でつくる牧畜用の袋は、道具を一切使わず、身体のみを利用した「からだ機」でつくられていて、それが染織の歴史のなかでは大変おもしろい技術であると先生方に指摘をいただきました。

吉本 実行委員のメンバーは、今みなさんとおっしゃったように若いころから何らかのかたちで、実重なるということがなくて、緩やかに重複している。そのなかでそれぞれがポイントとなるフィールドをきちんと押さえているので、消えた技術やこれから消えていくであろう技術、それをみつめてきた研究者としての情報の蓄積があります。わからないことがあっても、答えられるだけがあります。

柳 収集してきたものについて発表すると、さまざまな指摘が入るので、切り口はいろいろあるのだということに気づかせてもらえるのも共同研究のメリットですね。調査対象が全く同じであれば競争になっってしまうけれど、それぞれの視点を共有していけば、「織り」に対する理解は深まってきます。

吉本 メンバーの多くが、自分で実際に織ったり染めたりしてきた、その経験をもとに現場にでているというのは大きいですね。

井関 モノや情報を収集するときに、いわゆる実



赤タイの枠機。ラオス、フアパン県 標本番号 H0254400

4



ドルゼの杭機。地面に掘った穴の縁に座って、足踏み式の綜統(そうこう)を操作しながら機織り作業をするドルゼの織師。エチオピア、南部諸民族州(撮影・井関和代)

作者の視点で織物を観察する。それぞれが「自分で織ってみたい」と思えるような織りモノを集めてきます。だから研究会では、それぞれの地域において「国宝級」といわれるものが机の上にゴロゴロ並ぶことになりました。

柳 モノの構造や仕組みといったものは目にみえるので写真や映像といった記録におさめられるけど、人の技能を記録することは容易ではありません。研究者の視点に加えて、実作者という立場でみた場合、つくり手の技能を身近に感じられることが一番楽しいし、より調査対象にせまれると思います。

吉本 井関さんは、「国宝級」ということばを使われましたが、金銭的に価値が高いとか、ビジュアル的に美しいというだけではなくて、むしろ、一見すると「ボロ」のようにみえる安いものでも、技術的、学術的に価値があるものがあるわけです。いわゆる本当の「目利き」の収集品を目にする面白さがありますね。

上羽 わたしはもともと若いメンバーですが、着ていく服が一番悩むのがこの研究会なんです。メンバーは染めや織りの製作に実際に携わり、調査をされている方ばかりですから、織物に対して非常に目が肥えている。もちろん服装だけではなくて、研究発表するときも、とても緊張します。現場で、何をみて、何を記録しなくてはならないのか、もち帰る情報にただ「みた」だけのものであれば、全員から突っ込まれてしまうのではないかとという恐怖もあります。一方で、調査方法に迷うとき、的確なアドバイスを与えてくれるのもこの研究会です。「これがおもしろい!」と感じるものを共有してくれる場もこの研究会です。

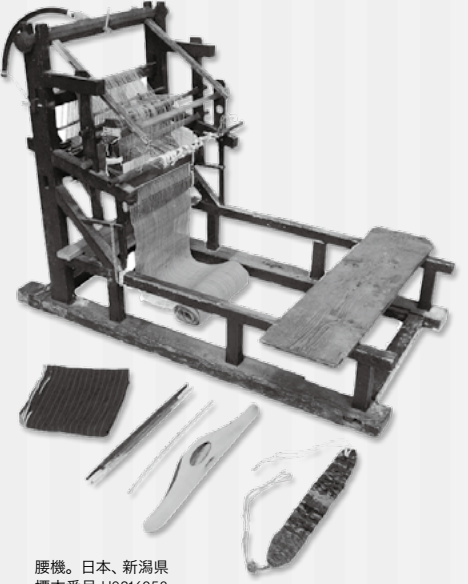
織物は、だれでも、どこでもできるもの

展示会にこられる方々に、何をみてもらいたいのか。あるいはどのような展示会にしていきたいかをお聞かせください。

井関 織機と織物そのものを紹介すると同時に、その背景にある人びとの暮らしを示す展示会です。従来、「織り」の展示会といえば、織布だけを紹介するものがほとんどでした。われわれは、つねに布をまどつてくるのに、その布がどうやってつくられているかということは、意識にのぼらないことが多いのではないのでしょうか。

柳 織機が約一五〇種並びます。織り途中の布と一緒に展示されるので、少しでも自分たちが身にまどっている布とそれがつくられる背景に関心をもっていたらいいと思います。

上羽 来館者の方々がどのような反応を示されるのか、非常に興味がありますね。来館者は必ず衣服を着ているわけですから、できれば、展示をみた後、お互いの服がどのように織られているのか、そんな話をしながら帰ってもらえることが理想です。そのためには、展示をする側の仕掛けが必要だと思います。ただ単に、織機や織物を置いておくだけではそんな話は展開されないだろうと思いますから。**吉本** たしかに、動いていない織機からその仕組みを想像するのは、日常的に利用していない方からすれば至難の業ですよ。そこで、先程も言いましたが、少しでもその仕掛けを知ってもらえるよう、今回は展示場の一面に織りの体験コーナーを設けるこ



腰機。日本、新潟県
標本番号 H0216958

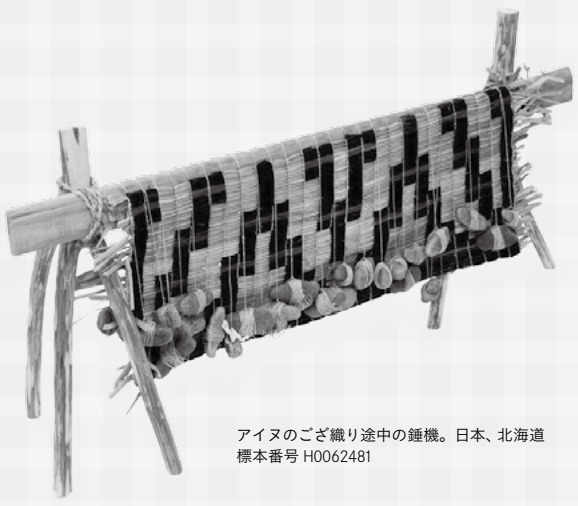
上羽 体験コーナーのほかにも、織りへの関心を促す工夫を盛り込みました。
たとえば織り途中の織物には、キャプションのほかに、研究者が選ぶ「ここが見どころ」というポイントを、POP広告のようなかたちで示すようにしています。
また、体験コーナーにくわえて、ワークショップ

とにしました。いわゆる織りのカラクリを、実際に触れて動かすことで、知っていたかどうかという試みです。

井関 「簡単な仕組みで、いかに複雑なものをつくるか」というのが織りのカラクリなんです。

つまり、複雑そうにみえて、じつはたいしたことをしていない。日常イメージする織機というのは、生産効率をあげるために非常に進化したもので、システムができあがってしまっている。けれども世界には、とても簡潔に布を織っているところがあります。もとをたどればタテ糸にヨコ糸を組み合わせるという基本構造はおなじみで、織物はだれでも、どこでもできるものである、ということに気づいてもらえればと思います。

吉本 「進歩した結果、複雑になった」というのが一般的な認識ですけど、それは人類にとって本当の「進歩」なの？という問いかけの気持ちわがわしに



アイヌのござ織り途中の錘機。日本、北海道
標本番号 H0062481

にも力をいれる予定です。それらをとおして見落としていた布の「当たり前」に気づいてもらえたらうれしいです。

井関 展示資料はどうしても織りのカラクリやその技術に重点を置くものになるので、ギャラリートークではむしろ布のバックグラウンドについて紹介したいですね。この布はなぜこの村で織られているのか、この織り方がなぜ伝承されるのか。そういった文化的な背景がわかれば、布に対する関心はよりいっそう深まると思います。ほかにも、夏にはなぜ麻を着るのか、など、日常的な布と人間とのかかわりみたいな内容についてもお話できればと思います。

偉大なる人類の財産の記録を、次の世代へ

特別展をへて、みなさんの共同研究はどのように展開していくのでしょうか。

柳 展示会で公開される情報は、われわれのもっているデータの一部でしかありません。

アカデミックな話でいえば、もっている調査データを整理し、再度報告書というかたちでつくりなおしたいと考えています。

上羽 収蔵庫に収められたたくさんの方の織物を目にして、改めて自分は織物が好きなんだ、ということを実感しています。ただ、わたしの研究の矛盾は、改めてモノや技術の背景にある人の暮らしなのです。井関先生もおっしゃられたように、どうやってつくるのか、どのようにしてこの技術を継承する

すべてはタテ糸から始まった！

ふるかわ みきお
古川 幹雄 株式会社七彩

展示の中心となる織機は、「テンション（張力）」が重要で、織物はすべて張力のそなわったタテ糸にヨコ糸が組み合わされている。どのようにタテ糸にテンションがかけられるのかは「織機の構造」によって変わる。展示の構成は、タテ糸へのテンションのかけ方の違いで織機を分けることから始まった。最終的に織物が織りあがるのは同じでも、その途中には、さまざまな異なるカラクリが仕掛けられている。そうしたカラクリの不思議なおもしろさを、皆さんに織って！みて！感じてもらいたい。

「織機の構造」の違いは織り手のからだの関わり方で見えてくる。腰機を例にしてみると、タテ糸にテンションをかけるための腰当てが織り手のからだのどのあたりにあり、からだを動かすことでタテ糸のテンションがどのように変化するのがわかる。ただし展示するすべての織機に、常に人が張り付いて、織物を織りつづけることは不可能なので、マネキンを使うことになっ

た。わたしは、これまで多くの衣装や布の展示に携わり、それらを表現するためにさまざまなマネキンを使ってきたが、織機の展示のためのものは、初めての試みだ。

世界各地の機織りの現場で、ほとんどの織り手は、伝統的な民族衣装を身にまどっておらず、普段着で織物を織っている。しかし、これらの多くは織機と一緒に収集されていないため、展示では衣装をまとったマネキンの数は少なく、ほとんどは裸のマネキンを使うことになった。またマネキンのポーズもさまざまなので、自由に動かせる関節が必要となった。透明素材や自然素材で試作してみたがしっくりこない。いろいろと試行錯誤を経て、展示空間に馴染んだ色調の特注シートを裁断し、2本の針金ではさみ、ねじることによって長いブラシ状の素材を製作し、骨組みに絡ませてマネキンに仕上げてみた。

マネキンをセットしてみると、不思議と先ほどまで静止していた織機が動き出し、織っている音まで聞こえてくるようだ。今回の展示では、それらのマネキンが、動くはずのない数々の織機に命を吹き込み、さまざまな音色を奏でてくれることを期待している。



模様を織り出すためのタテ糸にヤマアラシのトゲを使った少数民族デネの機織り。カナダ、ノースウェスト準州 (撮影・吉本 忍)

触ってみる！
感じてみる！

織物再発見

上羽陽子 民博文化資源研究センター

今回の特別展では、体験型展示と題して、来館者の方々に展示場で実際に体験や作業をしていただき、織機の構造や織技術の基本原理を自然に学べる仕掛けを試みています。

具体的には、ふたつの性格の活動を用意しています。ひとつは、「布に興味を持つ！」をテーマに、展示場のなかに

体験コーナーを設置しています。自分の着ている衣服を拡大鏡でのぞくことから始め、それらがどのようにしてできあがっているのか。また、布に触りながら、なぜ、手触りや風合いが布によって異なるのかといったことを学びます。それらを踏まえて、織物のタテ糸とヨコ糸の関係を知り、織機の構造をわかりやすく理解することのできる装置も準備しています。さらに、展示場の織機や織物の見どころをわかりやすく解説する工夫も施しています。

もうひとつは、世界各地で現地調査をしてきた講師陣による事前申し込み制のものづくりワークショップです。繭糸の糸繰りや羊毛・木綿・麻繊維による糸つくり、西アフリカの織り技術やインドネシアのカード織り、牧畜民のからだ機など、その内容は多岐にわたります。ワークショップを通じて、世界各地の製作技術や文化背景について講師とともに一緒にじっくりと考えてみましょう。

わたしたちの周りには衣服をはじめ多くの織物があります。今回の体験型展示から、世界の織機で織物をつくってきた人びとの思いに触れるとともに、身近な織物への新しい発見があることを期待しています。

のか、ということに興味があるのだということとを、展示の準備をしながら再認識しています。今後も染織とその背景にある人の営みに着目し研究をすすめていきたいと思っています。吉本 手仕事の世界中でどんどん消えゆく状況にあります。共同研究のメンバーの大半は五、六〇代ですが、織りの実情を探るには、この年代が一番よいタイミングで調査することができたと考えています。わたしが最初にインドネシアへ調査にはいったのは一九七〇年ですが、それ以前であれば交通機関も発達していないし、世界大戦をはじめ、いろいろな事情があつて、自由に調査に出かけることはできませんでした。一方、機械化、デジタル化が進んだ現代では、手仕事そのものがのこっているところがきわめて少なくなっているというのが実情です。たとえのこっていたとしても貴重な技術を継承しているのはみな八〇代をこえたおじいさんやおばあさんです。聞けば、この方々が子どもの時分ですら、技術を継承していることは限定的だったという例が少なくありません。

これは人類の、偉大な財産の喪失です。このタイミングで調査することができたわれわれはきちんと成果をまとめなくてはならない記録をしつかりのこしておかなくてはならないと、強く思います。

井関 研究者が定年で退職すると、資料だけがのこって、収集された経緯すらわからないということがまれに起こります。

われわれが集めた資料やデータを収蔵庫のなかで死蔵させるのではなく、上羽さんの

ような若い研究者の方がたに、モノの情報のみならず、収集した意義をもリレーさせていく必要があるかもしれませんね。

上羽 そのことに関して言えば、わたしが染織について勉強しようと思ったのは、高校生のときに、ある展覧会でインドやアフリカの絞り布を目にしたことがきっかけです。それらの布は、じつは井関先生が所有されているものだったので、今回の特別展をみて、織りの研究をしよう、染織について学ぼうという若い方がひとりでもいたらいいな、と思います。そして、いつかわたしが歳をとったとき、こういった座談会で、わたしが収集した「ラバーリーの織物をみて研究者をめざしました」という人に出会うことができれば、こんなにうれしいことはありません。

吉本 展覧会や共同研究会には人と人をつなぐ力があるんですね。

わたし自身をふりかえれば、民博という母体があつて、そこに共同研究というシステムがあつて、調査、研究をするともに、映像取材や標本資料の収集をすることができた。そして手仕事の実情を確認できるベストなタイミングで、研究会のメンバーが、世界に網をかけるようなかたちで調査をすることと併行して共同研究をおこなうことができました。

世界中の織機と織り、そしてその技術を一堂に集めた展覧会はいままでに例がありません。ぜひとも多くの人たちが特別展にお越しいただき、織って、みて、人類の偉大な財産ともいうべき「手仕事」に関心を寄せていただきたいと思います。



道具を使わず、からだのみを利用して、放牧のときに使う生活用品を入れる袋を製作するラバーリーの男性。飼育しているヤギやラクダの毛を紡いだ紐をタテ糸とヨコ糸にして、織り上げてゆく。インド、グジャラート州カッチ県 (撮影・上羽陽子)



腰機で全周約6メートルの輪状の布を織るグルン女性たち。織り上がった羊毛織物は、フェルト状に加工してから販売される。ネパール、オカルドゥンガ郡ルムジャタル村 (撮影・上羽陽子)



竹筒を半分に割り、細長い孔と丸い孔を交互にあげた綜絢(箱型開孔板綜絢)をそなえた枠機でムシロを織るタイブアの女性。ラオス、シェンクワン県 (撮影・柳 悦州)



複雑な紋様を織るためのタテ糸に直交する綜絢(垂直紋綜絢)が2組備わった、ラオの枠機。ラオス、シェンクワン県 (撮影・柳 悦州)



「身分証明書」は「わたし」を証明できるのか

チェン ティエンシ
陳 天璽
民博 先端人類科学研究部

国家の制度のもと、自己を証明する手段のひとつとして、公的な機関が発行する身分証明書がある。さまざまな目的や要因によって、国や地域を移動する(せざるをえない)人びとや、その次の世代にとって、身分証明は単なる制度以上の重要な意味を帯びてくる。



タイのミャンマー国境近くに暮らす家族。子どもは住民登録の際、タイ人であるはずなのに、ミャンマー人としてタイ政府に登録されてしまった

おらず、事実上無国籍状態である。そのため、区役所に要求された書類がベトナム領事館から入手できないのだ。乳飲み子を抱え東奔西走したが手続きがうまくいかず、若い家族は困り果てていた。

わたしは彼女に、国籍証明書や独身証明書がなくとも、難民である旨の陳述書を添付すれば書類を受け付けられた事例があることを伝え、再度役所に確認するようアドバイスした。翌日、「やはり領事館からの書類が必要だと言われました」と声を落としていたが、数時間後、「A区役所ではなくB区役所に問い合わせたら、陳述書で受けつけられるかもしれないと言われました」と声が躍っていた。

わが子の身分証明書を整えたい二人は必死に情報を集め、不慣れな手続きのため一喜一憂している。特例だからとはいえ、同じ市内で同じ人が同じ手続きをするのに、役所によって必要書類と対応が違うというのは容認しがたいことだ。

ここで注目したいのは、身分証明書とそれに関わる役所の対応が、どれだけわたしたちの生活を左右しているかということだ。そして、実態と合わない身分証明書を与えられている人がおり、当事者でさえよく理解していないこと、その状態が子どもの身分にまで影響しかねないという現実だ。

時代に呼応した課題

人は、話すことは、家族や出生地、生年月日、居住地、名前など、いろいろな要素で「自分はなにものか」を示すことで立場を確保している。稀に、長年のつきあいや知人の紹介で身分証明書を必要としない場合もあるが、多くは身元照会のために公的な機関が発行する身分証明書を求められる。公の機関が発行した身分証明書は絶対的なモノと信じられがちだが、実態と合わないこと、解釈・運用が変わったり、発行する側と受ける側の理解に齟齬が生じたり、もともと無くて証明できないということもある。

身分証明のしくみは時代によって変化する。しかも分かりづらい。日本では二〇一二年七月九日から新しい在留管理制度が導入され、これまで外国人の身分証明書で



認知届が出せなかった赤ちゃんと祖母

ライフサイクルと身分証明

昨年から国立民族学博物館ではじまった共同研究会「人の移動と身分証明の人類学」は、人の移動と在留管理に基づく身分証明が、移動する人びとの人生と次の世代にどのような影響を与えるのかに注目している。具体的には、旅券、渡航証、在留カードといったさまざまな証明書が、出産・育児から就学、就労、結婚・離婚、居住、家庭生活、街づくり参画、老後生活、死・墓や弔いに至るライフステージにどのような影響を与え、また個人のアイデンティティと社会のグローバル化とどうかかわっているのかを解明することが目的だ。

共同研究会のメンバーは、人類学、法学、歴史学、社会学など諸分野の研究者や現場

「子どもの認知届が出せなくて……」

先日、二〇代の女性から「子どもの認知届が出せなくて……」と相談の電話があった。ベトナム難民二世だという相談者は、日本人の若者と区別がつかないほど流暢な関西弁まじりの日本語で経緯を話した。外国人登録上、定住者で「ベトナム」国籍である彼女は、香港の難民キャンプで生まれ四歳の時に来日し、日本で育った。日本人男性と交際し、婚姻届を出す前に切迫早産で赤ちゃんを出産した。男性が「赤ちゃんの認知届を出そうとA区役所に行ったところ、母の国籍証明書と独身証明書が必要だといわれ手続きができなかった」という。

外国人登録証上国籍は「ベトナム」とあるが、海外で生まれた難民二世の彼女に関する書類はベトナムの行政には提出されて



タイ在住ベトナム系人がもつ複数の身分証明書。左から、タイ政府発行の難民証明書、在留資格証明書、ベトナム政府発行のパスポート

あった「外国人登録証」が廃止されて、「在留カード」に代わった。「みなし再入国許可」など留外国人の移動への一部緩和がみられるなか、一方では、「有効な旅券をもたない」とみなされている事実上の無国籍者はこの対象外となる。具体的にどうなるのか区役所に問い合わせたところ、明快な答えが得られなかった。

生活の必需品でありながら、私たちは意外と身分証明書の真相を知らない。本共同研究会では、グローバル化する現代社会、ライフサイクルの中で直面する個人と身分証明をめぐる関係を明らかにしたいと考えている。

共同研究
「人の移動と身分証明の人類学」
代表：陳天璽
2011年10月〜2015年3月

夏休み、みんなくの観覧料が無料になります！
 期間 8月26日(日)まで
 無料観覧についてはホームページ、電話でぜひご確認ください。

特別展

「世界の織機と織物」
 織って！みて！織りのカラクリ大発見！
 ヨーロッパで紀元前から使われてきた錘を使った織機、カナダの少数民族「ネネのヤマアラシ」のトゲを織り込んだ織物をはじめとして世界各地の多種多様な織機と織物を紹介します。会場の2カ所では、さまざまな織りのカラクリも体験できます。
 会期 9月13日(木)～11月27日(火)
 会場 特別展示館および本館1階エントランスホール

■関連イベント
 ◆連続講座「博物館にさわる」
 ▼8月11日(土)
 「タッチカービングによる物指し鳥」
 講師 内山春雄(野鳥彫刻家)
 ▼8月25日(土)「ヒトのカタチ」
 講師 柴田良貴(筑波大学芸術系教授、彫刻家)
 各日13時30分～16時(開場13時)
 場所 第5セミナー室(先着100名)
 ※参加無料、申込不要
 ◆展示場クイズ「みんなQ」探究ひろば編
 期間 8月2日(木)～8月25日(土)
 場所 探究ひろば

企画展関連写真展
 「写真で見る東日本大震災と被災文化遺産のレスキュー」
 会期 8月21日(火)まで
 会場 企画展示場
 みんなく映画会 日印国交樹立60周年記念
 「インド・クラシック映画特集」
 ▼8月4日(土)「ジャンカラパラナム」
 1979年、K・ヴィシユワナート監督、テルグ語、145分
 解説：寺田吉孝(国立民族学博物館教授)
 ▼8月5日(日)「第一の敬意」
 1985年、パラーティフリージャー監督、タミル語、180分
 解説：杉本良男(国立民族学博物館教授)
 場所 講堂(先着450名)
 ※参加無料、申込不要

研究公演
 「神への祈りと喜びの舞曲
 —バツハからバルトークへ—」
 世界で活躍しているチェリスト、ヴァイオリン、ニスト、ピアノのトリオを招き、バツハにおける舞踏的要素に注目しながらクラシック音楽と民衆文化との関わりを紹介します。
 日時 9月2日(土) 13時30分～15時30分(開場13時)
 場所 講堂(定員450名)

※参加無料、要申込
 申込締切 8月21日(火) 必着
 博導連携教員研修ワークショップ2012 in みんなく
 「学校と博物館をつくる国際理解教育
 —新しい学びをデザインする—」
 日時 8月7日(火) 10時20分～17時(受付10時より)
 場所 本館2階セミナー室及び本館展示場内
 【第一部】講演とミュージアムツアー
 【第二部】ワークショップ
 ※参加無料(定員に余裕があるワークショップは、当日参加も可能です)
 夏休み子どもワークショップ
 夏の自由研究はこれで解決！「働く」って何？
 アフリカの人々の生活をみてみよう！
 日時 8月21日(火) 10時30分～16時(受付10時より)
 場所 ナビひろばほか
 対象 小学3～6年生(保護者同伴であれば小学1、2年生児童も参加可能)
 ※参加無料、要申込

みんなく秋の遠足・校外学習 事前見学&ガイドダンス
 秋の遠足・校外学習にむけて事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイドダンスを開催します。新しくなった展示についても研究者が展示場で説明します。
 実施日 8月28日(火)、30日(木)、31日(金)
 時間 14時～17時
 場所 第5セミナー室ほか

「第3回現代インド・南アジアセミナー」
 現代インド・南アジアの歴史学、経済学、生態人類学、文化人類学、ジェンダー研究、ツーリズム研究をそれぞれ牽引する8名の講師による連続講義です。
 実施日 9月22日(土)、23日(日)、24日(月)
 時間 13時30分～18時30分(予定)
 会場 第5セミナー室
 定員 70名
 ※参加無料・要申込(9月9日応募締切・先着順)

みんなくはミナール

会場 国立民族学博物館 講堂
 時間 13時30分～15時(13時開場)
 定員 450名(当日先着順)

第411回 8月18日(土)
 【探究ひろば関連】
 ノーシャルメディアに見る人とモノの関係
 講師 濱崎雅弘(産業技術総合研究所研究員)
 聞き手 中村嘉志(国立民族学博物館客員教員)
 参加費 無料(この期間展示を無料でご覧いただけます)
 今回はこれまでとは少し毛色の異なる話題をお届けします。人と人の関係を、コンピュータネットワーク上でのデジタル作品作りの視点から考えてみます。デジタル作品と聞くとも味乾燥なイメージを抱く方も多いと思います。しかしそこにはモノと人、人と人との関係に依拠したモノづくりが存在します。意外に泥臭いものです。これらを近年流行のノーシャルメディアと絡めてお話しします。



第412回 9月15日(土)
 【特別展「世界の織機と織物」関連】
 手仕事への回帰
 講師 吉本忍(国立民族学博物館教授)
 参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要ですが)
 人類史の中枢技術として位置づけられる織りの技術は、産業革命以降に人類が手仕事を放棄し続けてきたことと深くかかわっています。その歴史的経緯と現代社会が直面する危機的状況、そして、全人類の手仕事への回帰の必要性についてお話しします。

友の会

国立民族学博物館友の会 電話06-6877-8893(平日9時～17時) FAX06-6878-3716
 http://www.senri-f.or.jp/ e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
 定員 96名(当日先着順、会員登録必須)
 第411回 9月1日(土) 14時～15時
 聖書を生きたる人びと
 南部アフリカにおけるキリスト教独立教会の現在
 講師 吉田憲司(国立民族学博物館教授)
 南アフリカやジンバブウェ、ザンビアなど南部アフリカは、現在、地球上でキリスト教が最も急速にひろがっている地域です。治療儀礼など伝統的な信仰とのせめぎ合いの中で、聖書の世界を忠実に生きようとしている人びとの姿を追います。
 第412回 10月6日(土) 14時～15時
 【特別展開連】
 世界の織機と異形の織物
 講師 吉本忍(国立民族学博物館教授)
 世界各地では、さまざまな織機を使って、さまざまな織物が織られてきました。今回は、それらのうちから、輪状、楕円状、管状、丸紐状、ひだ状、交叉状、フオーク状、うろこ状、袋状などの異形の織物と、それらを織る織機を紹介します。

東京講演会・食生活会
 第103回 9月22日(土) 15時半～17時
 アフリカを食べる
 講師 竹沢尚一郎(国立民族学博物館教授)
 西アフリカのニジェール川流域に暮らすボソの人びとは、米を主食とし、副食に魚を食べるという日本と似通った食生活をしています。昔ながらのやり方で魚を追って暮らす彼らの生活を、映像を用いながら紹介します。
 講演会終了後にはマリやセネガルなど西アフリカ地域の家庭料理をじっさいに味わう食生活会もおこないます。(食生活会は17時半～19時)
 参加費 講演会のみ3000円(会員外5000円) ※飲物付
 食生活会3500円(会員外4000円)
 ※講演会参加費含む。食生活会の内容など詳細は、「友の会」まで。
 会場 レストラン「カラバッシュ」
 (JR浜松町駅から徒歩すぐ)
 定員 40名(要申込)

※イベントや刊行物について、くわしくはホームページをご覧ください。
 ※電話でのお問い合わせの受付時間は9時から17時(土日祝を除く)です。

■広瀬浩二郎・嶺重慎 著
「さわっておどろく！」
 ——点字・点図がひらく世界——
 岩波書店 定価：924円
 少ない材料から多くを生み出す「したたかな創造力」、常識にとらわれない「しなやかな発想力」をキーワードとして、点字・点図のおもしろさを紹介する「さわる文化」の入門書です。

■広瀬浩二郎 編著
「さわって楽しむ博物館」
 ——ユニバーサル・ミュージアムの可能性——
 青弓社 定価：2,100円
 ユニバーサル・ミュージアム(誰もが楽しめる博物館)を実現するためには何が必要なのか。多様な実践事例を挙げて、あらたな博物館像を大胆に提案します。

■染田秀藤・関雄二・網野徹哉 編
「アンデス世界」
 ——交渉と創造の力学——
 世界思想社 定価：4,095円
 歴史学・人類学・考古学の立場から、アンデス世界とそれにまつわる言説の創出・発展・変容過程で生じた多様なコンフリクトの真相に迫り、その歴史的意义を論じる。2009年におこなわれた阪大・民博共催の国際シンポジウムの成果刊行物。

国立民族学博物館
 ミュージアム・ショップ
 電話 06-6876-3112
 FAX 06-6876-0875
 e-mail shop@senri-f.or.jp
 水曜日定休
 ウェブサイトもご覧ください。
 オンラインショップ
 「World Wide Bazaar」
 http://www.senri-f.or.jp/shop/

明治ビードロ(硝子)の
 タンブラーと箸置き(複製物)
 室町末期に、長崎に渡来したオランダ人によって製法が伝えられたビードロ(硝子)。江戸時代にはまだまだ貴重なもので、生産技術がひろまって一般庶民の生活で使われるようになったのは明治のころになります。
 いまミュージアム・ショップでは、明治・大正のころの加飾手法をもとに、さまざまに再現した手づくり硝子のタンブラーを紹介します。
 夏の暑い時期に、涼やかなビードロで清涼感を演出してみませんか。

ビードロのタンブラー
 (写真左から「四つ葉」「飛線(とびせん)」「渦巻き」「かきあげ」「十草」)
 各 1,575円
 団扇の箸置き 各 945円
 金魚・鮎の箸置き 各 630円
 価格はすべて税込



屋根の下から発見された古文書やお札。2011年7月13日
歴博は、気仙沼市の尾形家住宅を中心に活動しています。尾形家は約200年にわたり、地域の歴史を蓄積し、行事や信仰を育んできましたが、津波により敷地から50メートル近く流されてしまいました(提供・国立歴史民俗博物館)



石巻市内でのレスキュー。2011年6月22日
民博は、被災した民俗資料の救援・支援活動を宮城県・岩手県を中心におこなっています。地域文化の記憶をとどめている民俗資料は、被災地が復興していくなかでさまざまなよりどころになると考えています

企画展関連写真展

「写真で見る東日本大震災と被災文化遺産のレスキュー」

会場：本館企画展示場A
会期：開催中～8月21日(火)

企画展(人間文化研究機構連携展示)

「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」

会場：本館企画展示場A
会期：9月27日(木)～11月27日(火)

マとするプロジェクトの代表をとめています。
九月二七日から開催予定の企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」はこの連携研究の一環として位置づけられています。
企画展では、文化遺産の復興作業に目を向け、文化遺産の意義を改めて見直すとともに、それらを通じて、この震災の記憶をいかに未来につなぎ、次代の社会を築き上げていくのかについて、考えるきっかけづくりができればと準備を進めています。

関連写真展の開催
現在、本館企画展示場Aでは、企画展関連写真展として「写真で見る東日本大震災と被災文化遺産のレスキュー」を開催中です(～八月二二日まで)。

この写真展では、被災地の博物館のひとつ仙台市博物館が作成した仙台平野の災害をテーマとしたパネルとともに、機構を構成する諸機関、とりわけ国文研、歴博そして民博が実施してきたレスキュー活動を写真パネルにより紹介しており、先のべた機構による支援活動の一年を総括しています。
レスキューの現場では、大規模な津波災害といふこれまで経験のない状況のもと、さまざまな問題に直面してきました。
震災発生から現在に至るレスキュー活動を通して、まずは、被災地の現状の一端を知っていただくとともに、開催予定の企画展に、より強い関心をもっていただければと願っています。



会場では、写真と解説文からなるパネル展示により、活動状況を紹介しています

企画展関連写真展のご案内

写真展「写真で見る東日本大震災と被災文化遺産のレスキュー」から
企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」へ

ひだか しんご 日高 真吾 民博 文化資源研究センター

東日本大震災の発生から間もなく1年半が経過しようとしています。
震災の記憶をとどめ、次代に継承することは、被災された方々を忘れないことであり、また、将来発生する、あらたな災害を減じることにもつながります。

レスキュー事業への支援
東日本大震災の発生以来、国立民族学博物館をその一員とする人間文化研究機構(以下機構)では、震災に関わるさまざまな活動をおこなってきました。そのひとつが文化庁からの協力要請に基づき実施してきた文化財レスキュー事業(以下レスキュー)への支援です。
レスキューでは、国や地方による指定の有無に関わらず、民俗資料や歴史資料などさまざまな文化財が対象となりました。これは従来の枠組みを超えた設定であり、文化財というより、むしろ文化遺産がその対象となったといえます。
今回の震災では、人命をはじめ甚大な被害が発生しましたが、文化遺産もまた例外ではありませんでした。震災の発生に際し、人命救助や食糧の確保などが優先されることは当然です。しかし、被災地の人びとが復興への道をたどる過程で必ず必要となるのが、祖先が長い年月にわたって継承してきた有形・無形の文化遺産です。わたしたちは、その段階がやってきたとき、できるだけ多くの文化財が被災前と同じような状態で活用できるように、このレスキューの支援に取り組んできました。
このレスキューの支援には大きくわけて次の四つのプログラムがあります。
・国文学研究資料館(以下国文研)を中心とした「国文学資料・典籍等」に関わるレスキュー
・国立歴史民俗博物館(以下歴博)を中心とした「考古・歴史資料等」に関わるレスキュー
・国立民族学博物館(以下民博)を中心とした

継続的に進めていくために
震災発生から一年以上が経過した現在、レスキュー活動への支援を緊急時の対応から長期的視野に立った、より継続性のある活動に移行していくことが求められています。
機構では、「東日本大震災および大規模災害に関する連携研究」という大枠のもと、具体的ないくつかのプログラムを設定し、わたし自身もそのなかで、「文化遺産の復興にむけたミュージアム活用」をテーマとして取り組んでいます。
「民俗資料等」に関わるレスキュー
・国際日本文化研究センターおよび総合地球環境学研究所を中心とした「文化財所在マップ等」のとりまとめ



復旧作業第1期完了時の乾燥状況。2011年7月13日
国文研がレスキューに携わっている自治体文書は、地域復興に欠かせない行政上の基礎資料であるとともに地域住民の記録であり、生きた証ともいえます(提供・国文学研究資料館)

入場無料からみえてくるもの レバノン・サイダ旧市街の博物館群

菅瀬 晶子

民博 民族社会研究部

地球
ミュージアム
紀行

入場料の高さと施設の内容の充実ぶりは、比例関係にあるのだろうか。博物館などの入場料が高い傾向にある中東地域で、レバノン・サイダ旧市街のふたつの博物館は、入場無料かつ内容も充実しているという。しかし、無料には無料の理由があるようだ。

入場料が高い！

「中東の遺跡や博物館の入場料は、なんであんなに高いんだー！」
学生時代、安宿に長逗留しながら調査をしていると、宿で顔をあわせる旅行者たちから、必ずそんな文句を聞かされたものだ。その最たる例が、ヨルダンの誇る世界遺産・ペトラの入場料である。なにしろ、乗合タクシーひと乗りの値段が一〇〇円に満たない国で、もともと安い一日入場券ですら、五〇ディナール（約六〇〇〇円）である。いくら外国人向けの価格設定であるとしても、やはり理不尽なまでに高額と言わざるをえない。

ペトラは極端な事例だが、そのほかのほとんどの遺跡や博物館の入場料は、許容範囲内ではないかとわたしは思う。なに「入場料が内容に見合わない」とみなされがちなのは、おそらく施設のありかたに問題があるせいだろう。どれほど貴重な展示品であっても、土や埃をかぶったまろくなく解説もなく、投げやりに陳列されたのでは、観る者の好奇心も萎えてしまう。ただし近年は、そんな中東各地の博物館の状況も、徐々に変わりつつあるようだ。それを端的に示しているのが、レバノンのサイダ旧市街にある石けん博物館とドゥッバーネ邸である。

財団が運営するふたつの博物館

かつて海洋民族フェニキア人の都市国家として栄えたサイダは、現在も人口約二〇万人を抱えるレバノン南部の中心地である。十字軍時代に作られた「海の城砦」と、マムルーク朝時代の城壁に囲まれた旧市街は、サイダの誇る観光資源だ。

歴史ある石けん工場を改装した石けん博物館は、その歴史から製造過程、入浴文化までを展示している。入館者には常時めれなく無料ガイドがつき、詳細な解説シートは英語、フランス語、アラビア語の三言語で用意されている。訪れる者も、外国人から地元の高校生やカップルまで多種多様で、ほかの中東諸国の博物館ではみられない光景だ。また、伝統技法で作られた石けんや、サイダの特産品を手にとることができるミュージアムショップも併設され、こちらも客で賑わっていた。いっぽうのドゥッバーネ邸は、一八世紀初頭に建てられた、地元の有力者の豪華な邸宅を修復・公開したものである。壁や天井にほどこされたモザイクやステンドグラス、屋内に設けられた噴水など、繊細な東地中海地域の伝統建築を心ゆくまで堪能することができる。

これほど充実しながら、双方入場料が無料というのも画期的である。驚くわたしに、ドゥッバーネ邸の管理人が、誇らしげにこう言った。「サイダは特別だよ。国が管理している海の城砦以外は、どこも財団が運営しているからね」。じつはこのことばに、無料の裏にある意図が隠されている。

無料からみえる宗教勢力の構図

石けん博物館はスンナ派ムスリムのアウデ家によるアウデ財団、ドゥッバーネ邸はメルキト派カトリックのドゥッバーネ家によるドゥッバーネ財団が運営している。双方サイダきつての歴史ある名家で、ことにアウデ家は、二〇〇五年に暗殺されたラフィーク・ハリリー元首相の妻の実家であり、大銀行の運営でも知られている。つまり、ふたつの博物館はどちらも、サイダにおけるスンナ派とメルキト派カトリックの力を誇示する役割も担っているのである。もともと、キリスト教徒は海外移住が進んで人口が減少しているのに、ドゥッバーネ邸のほうは、過去の栄光といった趣ではあるのだが。

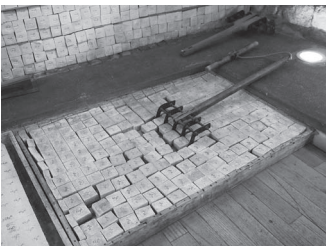
レバノンは人口約四二〇万、面積は岐阜県程度の小さな国だが、「宗教のモザイク」といわれるほどさまざまな宗教・教派に属する人びとが、微妙なパワーバランスのもとに集まっている。現在、南部で勢力を拡大し続けるシリア派に、スンナ派とキリスト教諸派は警戒を強めており、関係も悪化している。サイダもその例外ではない。

意欲的な博物館が誕生するのは、じつに喜ばしいことだ。しかしながら、その陰で宗教・教派間対立をおおる火種が生まれなければよいのだが。隣国シリアが内戦状態となってしまうと、レバノンの安定を、心から祈らずにはいられない。



ドゥッバーネ邸、天井を支えるアーチ部分の装飾。
チューリップは、オスマン帝国期に好まれたモチーフだ

ドゥッバーネ邸の噴水の間



実際の石けんを使って、
切り分け工程を展示している



石けん博物館の内部



海の城砦より、
サイダ新市街をのぞむ

社会を変えたくて ——アマチュアの「あきない」の素顔

「多文化をあきなう」。その「文化」は、担い手にとりてどのようなものであるのだろうか。そこに思いをはせたとき、「あきない」はたんなる経済活動を超越することができるのかもしれない。日本・ラテンアメリカ協力ネットワークが取り組むのは、「あきない」をとおした同時代に生きる人びと同士の間感である。

グアテマラとともに二〇年

グアテマラは、メキシコと国境を接する中米の国である。日本に似た山がちな地形に雨の多い温暖な気候で、高原に広がるトゥモロコシ畑と色鮮やかな民族衣装のマヤ系先住民の人びとに会うことができる。一九六〇年からの三六年間、政府軍とゲリラによる内戦で推定二〇万人の先住民が死亡・行方不明になり、一〇〇万人が国内外へ避難した。しかし暴力を終わらせ平和な社会を作る運動も着実に展開してきた。日本ラテンアメリカ協力ネットワーク（RECOM）は一九九二年からこうした動きに支援を始め、今年で創立二〇周年を迎える。

マヤの女性たちに寄り添うために

暴力のもつとも深刻な被害者が先住民の女性たちである。内戦では生活と信仰の基盤であった家や畑を焼かれ、夫など主たる生計者と死別した。弔いも被害の告発もできない毎日のなかで、彼女たちは心身ともに疲弊した。復興後の経済発展が始まった今日でも、男性であれば出稼ぎや日雇いなどの就労機会があるのに、女性は育児や介護に追われ、

それできない。さらに男性優位思想からくる家庭内暴力の問題もある。

こうした女性たちが生計を立てるには何をすればいいのか。その答えのひとつが伝統の織物を売ることだった。シンプルな腰機こしだてを使った綿織物だが、マヤ文化圏（二言語が話される）にある程度共通のモチーフをもちながらも、村ごとに色やレイアウトが異なり、その多様性・芸術性から「グアテマラの虹」と称なづえられている。織りを体得することは、彼女たちにとって、自分の村のなかでは一人前の大人になるための儀式であり、外では自分の所属を示す手段である。つまり自他共に認められるためにも重要なものなのだ。彼女たちの模索は、自分と自分の文化を肯定し、主体的に生きることにもつながる。女性たちは生活と伝統文化を再建・回復し、継続させてゆく主役でもあるのだ。

わたしたちはこの点に注目し、手織りの布製品を「民芸品」として日本で販売し、収益金を女性たちの支援に充ててきた。

RECOM創立当時、支援先の「つれあいを奪われた女性たちの会」（略称コナビグア）に対し

て、内戦中に軍に拉致され、山林で秘密裏に殺害された人たちの遺体発掘のために、車両を提供した。これにより山奥にも低コストで計画的に人や必要な機材を運搬できるようになった。また、治安上、活動が困難だった早朝や夜間に、移動することも可能になった。近年では、運営を担う会員が多く在籍するチマルテンango県内で、女性の社会参画を促すプロモーター育成事業を五年間継続して支援した。この結果、市町村会議員に対し、女性局を設置するなどの対策を要請する人もあらわれた。

わたしたちが「フェアトレード」に近い事業ができるのは、これまで人権・平和の分野で築いた人脈を生かし、共通の行動目標を掲げるグアテマラ国内の団体のなかから、仕入先を探せるおかげである。輸入業者をとおさず、現金払いまたは郵便振替のみの単純な決済を採用し、収益金は一般会計とは別に「グアテマラ基金」口座で管理・運用している。二〇一一年度の残高は四五万円であった。小額なりにも、必要な人に必要な支援を届けているという実感が、わたしたちの原動力である。

ただ、収益をアップして安定的な財源に育てたいという思いはあっても、会の実働人員は商売の経験のない有志なので、独力では難しい。資金以前に人手が不足しがちな状況で効果的な支援をするには、会として目指すものの優先順位を決め、戦略を練ることが急がれる。

批判とともに成功を目指す

わたしたちのようなアマチュアの「あきない」に

は批判もある。生産コストを下げにくく、マーケティングやデザインのプロがないために品質本位の競争に勝てる商品開発ができない、その結果スローガンほどには生産者に利益がなく、消費者も安く良いものを手にできない、というのが代表例である。ただし、わたしたちの考えはこうである。数あるモノのなかから民芸品を手にとってくれた人に、創り手の想いや暮らしを伝え、物理的距離や文化的な違いを越えた同じ時代に生きる者としての共感を呼び起こしたい。商品の優れた点も欠点も率直に伝えたあとで、その人が購入してくれば、全員が納得のいく取引をしたといえる。かわる人が愛着をもち、「きれいだな」と思えるモノを媒介にすることで、先進国の豊かな人が途上国の貧しい人を助けるのではなく、創る人と使う人という対等な立場に立てるようになる。

共感に根ざす「あきない」は、個人の経済的自由を保障し、集団の利害を調整し、文化的多様性を促進する機能をもちうるはずである。これを日常の買い物を通じて実現させた。

地球の資源、人間の労働力、そしてお金を、利潤追求だけでなく、互いが主体的に生き、平和に共存していくために用いる。そんな「あきない」はできるのか。それともこれはもう政治的な課題なのか。壮大な挑戦であるが、意識的に行動してこそ変化は起きる。わたしたちは、小さなグアテマラの小さな村々で、小さな成功例になることで、「できる！」と答えようとしている。



今年三月の現地訪問。一緒に検品する

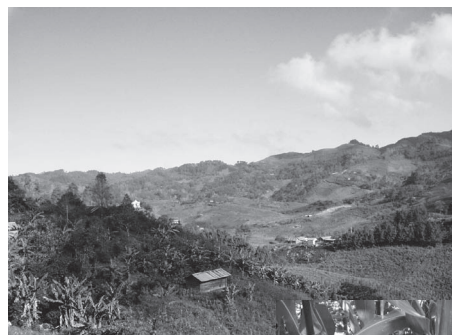


布の端を手作業で始末する様子を拝見



天然染色が生み出す「グアテマラの虹」

フェアトレードのお店での委託販売



高原に広がるトゥモロコシ畑



どこか日本人に似た面差しの子ども



内戦で夫を殺された女性たちをあらわす壁画

エチオピア、 アムハラ人の本音と建前

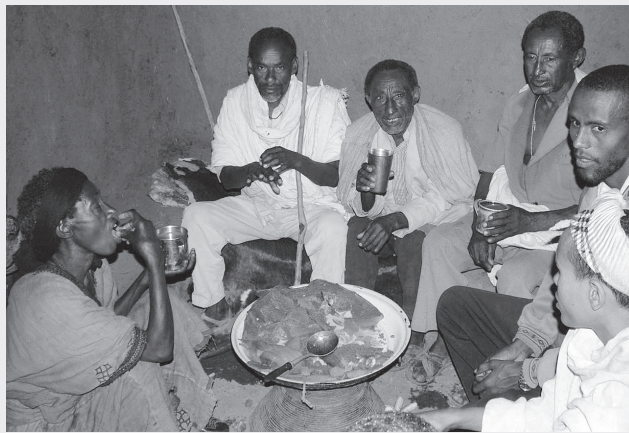
かわせ いっし
川瀬 慈

民博 文化資源研究センター

さあ、いっしよに食べよう

多民族国家のエチオピアにおいて、アムハラ人は国家の歴史上もつと長い期間、支配的な立場の民族として君臨してきた。日本から遠く離れた地で話されるアムハラ語だが、それを話すとき、歯がゆさと同時にわたしは不思議な懐かしさをおぼえることがある。

たとえば、日本特有の文化とみなされている本音と建前の論理である。これがアムハラ人のコミュニケーションにおいても重要なのだ。たとえば食をめぐるコミュニケーション。わたしが一〇年以上調査をおこなってきた北部の古都ゴンダールにおいて、人が食事をする場にくわすと「インネブラ！（アムハラ語で「さあ、いっしよに食べよう」の意）」と声をかけられる。声をかけられた側はしかし、どれだけ腹がすいていたとしても、うかつのつてはならない。なんらかの建前を述べて、誘いを断ることが美德とされる。そのことを文字通り受け取り、誘われるままに食事に手をつけたらどうなるか？ その人物は、非常識な人として非難されるのである。知る人ぞ知る、京都の「ぶぶ漬け」の話をおもいだしてしまう。



エチオピアの主食、インジェラを食べる人びと

アムハラ人の「奥ゆかしさ」

また、「本音」は独自の言いまわしによって隠されることもある。人びとの生活になじみが深い祝祭儀礼の音楽を担う吟遊詩人の唄のなかには「サムナワルク（「蟬と金の意）」とよばれる暗喩的表現による言

いまわしが各所にみられる。聴き手は、語の配置や発音を変化させて、頭のかであらたな語をつくりだし、蟬を溶かすがごとく、金、すなわち詩のなかにかくされたメッセージを導き出す必要がある。表面上は、聴き手の容姿を褒める内容であったり、地名を紹介するようには聞こえる唄のなかに、盛者必衰のほかなさを説き、驕り高ぶるものを強く戒める警句が隠されていたりする。吟遊詩人は唄のなかで、時の権力者を褒め称えるのみならず、この蟬と金によって婉曲的に揶揄したともいわれる。

以上のようなアムハラ人のコミュニケーションの「奥ゆかしさ」はどこからきたのだろう。それが、一七世紀から一八世紀にかけて栄華を極めたゴンダール王朝の封建社会の産物なのか、アフリカにはめざらしい文字文化の発展とかわるのか定かではない。わたしは、アムハラ流の本音と建前に翻弄され、その理解に苦労すると同時に、その内奥に潜む歴史文化に好奇心を刺激されて止まないのである。

みまぼく 私の逸品 モンのスカート

標本番号 H0174469
地域 タイ王国
受入年 1990年

民博 外来研究員

みやわき 宮脇 千絵

九月一三日から開催される特別展「世界の織機と織物」には、世界各地のさまざまな型式の織機がずらりと並ぶ。そのなかに一九九〇年に収集されたタイに暮らすモンの腰機こしばたがある。この腰機と同時に収集されたのが、写真のスカートだ。手織りの布に装飾を施した、プリーツたっぷりこしばたの膝丈の巻きスカートである。

スカートをつくるためには、織り幅約三三センチメートル、長さ五〜六メートルの平織りの布を二枚使用する。一枚目は、ロウケツ染めを施し、スカートの中央部分に使用する。二枚目は、まず織り幅の半分、約一六センチメートルに裁つ。一方は藍染めをし、もう一方は、そのままスカートの上部になる。これらを縫製し、細かいプリーツをとる。モンの人びとはどちらかといえば、織りに趣向を凝らすのではなく、織りあがった布に装飾を施すことで意匠を凝らす。

わたしが調査研究をおこなっているのは、タイのモンのルーツでもある中国雲南省うんなんのミャオ族（自称モン）の人びとの服飾文化についてである。二〇〇七年以降、本格的に調査を始めたわたしは、残念ながら腰機を使用している現場をみることがない。一九七〇年代には腰機に代わって、より楽な姿勢で作業ができる高機たかばたが普及したからだ。腰機には、屋内外の好きなどころで作業ができ、作業しないときには小さく収納できるという利点があるものの、腰に負担がかかるし、来客や急な用事のためにすぐに対応できない不便さがあった。

腰機でも高機でも、織り上がる布に違いはないという。だが、モンが伝統的に使用してきた麻繊維は、収縮性がないため高機にかけると切れやすい。そこでタテ糸に綿糸を使用することで、これを解決した。綿糸は一九八〇年代以降にモンの暮らす農村にも流通するようになった。さらに二〇〇〇年代以降は、化繊布の流通が拡大した。これはミシンで縫製し、プリーツをとるだけでスカートになるため、織りの作業自体が過去のものになりつつある。素材の違いによって製作時期を推し量ることのできるスカートは、モンの歩んできた暮らしの変化をも物語ってくれる。



アボリジニ研究事始め

こやま しゅうぞう
 小山修三
 民博名誉教授

夢のワールドへ

みんぱくができたころ、館員は海外調査に出ようという雰囲気が強かった。「世界の民族を知ろう!」を看板に掲げてできた博物館だったし、七〇年万博が象徴するように日本経済のぼり坂だったことも幸いした。

ところが、世界的には民族学は転換期、そう簡単に現地のムラに入れてもらえない時代にさしかかっていた。その理由は「調査モンがやって来てばちばち写真を撮り、あれこれ聞きまわって論文を書き、職をえたらあととは知らん顔、迷惑ばかりで何の見返りもない」という声が高まっていたからである。

野性に生き、狩猟採集生活を送るアボリジニ社会は人類学者にとって夢のワールドのひとつだった。一九世紀以来、世界の学者がこの大陸に詰めかけ、数多くの記録が蓄積されている。考古学者だったわたしも、そこに行けば「縄文人に会える」と考えていた。思えば呑気なものだった。

市場に通用する作品を開発し商品化する、それがアート・アドバイザーとよばれる人たちの腕にかかっていた。

白人アドバイザーの存在

それまで空白に近かった日本のアボリジニ研究を立ち上げるためには、資料を集めることと調査地を確保することが必要だった。幸いそれが成功したのは、まずみんぱくの展示資料の購入があったからである。オーストラリア国立大のピーターソン教授に「君たちの調査は、美術・工芸品を購入するから許可が



アーナベラ・セツルメント (砂漠のオアシス)



来日した女性アーティスト、ユバティさん。砂漠地方では技術指導者としても活躍した (1983年)



ヒリヤードさんと (1986年)。わたしたちの調査のよき相談役だった



伝統的デザインを取り入れたバティック。市場に通用する作品として高く評価された

アボリジニ社会とキリスト教会

オーストラリア大陸がイギリスの植民地にされてから、先住のアボリジニ社会は大きな打撃を受け、絶滅寸前まで追い詰められた。それを救ったのは、キリスト教会の人びとだった。独善的で押し付けがましいという批

おりた。現地の人に好かれることはもちろんだが、白人アドバイザーの信頼をえることがもっと大切だよ」と言われたことを憶い出す。

この文を書いたのは、わたしたちが大変お世話になったW・ヒリヤードさんの計報を聞いたからである。享年九二歳。長老派教会がつくった中央砂漠のアーナベラ・セツルメントで一九五四年から八二年まで献身的に働き、アート・アドバイザーとして「ろうけつ染め」を導入して注目された。彼女には、一九八三年にはアボリジニ女性たちとともに来日して

判はあるものの、暴力にはしりがちな開拓者に比べ、人道主義的で実務をこなせる教会員を送ってその役割を果たしたことは確かである。遠隔地で厳しい環境下の中央砂漠や北海岸のアーネムランドなど旧保護区が活動の中心だった。ところが、一九六七年の国民投票によって、「アボリジニは国民である」と認められ、政府は七〇年代に入ると福祉やインフラ整備などこの社会が自立するために多額の資金を投入しはじめる。

その結果、急激な貨幣経済への移行が起こり、社会組織や経済観の異なる人びとの苦闘がはじまる。政府は、自立を助ける実務者として、主として白人のアドバイザーたちを投入するが、そのときモデルとしたのはキリスト教会の活動だった。

しかし、農漁業などの産業にたいする成果はほとんど上がらなかった。唯一の希望は美術工芸部門だった。芸術作品とおみやげ品の製作、特に手軽につくれる小さな彫刻や編み物などは現金収入源となって日常生活に役立つことからである。各地に工房がつけられ、展示会を開いてもらい、一九九二年の特別展にも来ていただいた。おかげで、みんぱくのアーナベラ・コレクションは充実したが、それにもまして、彼女の経験に基づくアドバイスにより現地の人びとと楽しくつきあいがら調査ができた。

こうして、世話になった人たちがつぎつぎとなくなっていくことに、三〇年という歳月の重さを感じる。今も若い研究者はワールドをめざして、さまざまな苦労をしているのだろう。成功のカギとなるのはやはり人間関係であり、真心の問題だとおもう。

8月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間 14時30分から15時30分

■この期間展示観覧料は無料です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。どんでん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

5日
(木)

話者：広瀬浩二郎（国立民族学博物館 准教授）
話題：さわっておどろく「手学問のすゝめ」
——ユニバーサル・ミュージアムの可能性——
会場：本館展示場（ナビひろば）

12日
(木)

話者：加賀谷真梨（国立民族学博物館 機関研究員）
話題：沖縄の離島社会における高齢者福祉
会場：本館展示場（ナビひろば）

19日
(木)

話者：岩谷洋史（国立民族学博物館 機関研究員）
話題：「身体」について考える：
酒蔵でのフィールドワークを通じて
会場：本館展示場（ナビひろば）

26日
(木)

話者：竹沢尚一郎（国立民族学博物館 教授）
話題：東日本大震災被災地のまちづくり
会場：本館展示場（ナビひろば）

1年間みんなくは何度でも入館できる「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいです。

- 特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
 - ◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
 - ◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。
- 詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893/平日9:00～17:00)

編集後記

日ごろ思っていたことがある。私たちの日常のことは使いのなかに繊維や織りに由来する比喩がとても多いのだ。それも「思考」や「表現」にまつわる言いまわしである。「ことばの綾」「思いを紡ぐ」「詩を編む」「記憶が織りなす……」など、思いつくだけでも結構ある。今でこそ「綾」や「紡ぐ」はもちろん、「織る」という行為さえ、道具とともに日常とは遠ざかってしまったが、かつては身近な存在であったに違いない。だからこそ、このような繊細で抽象的な表現に比喩として用いられたのだろう。調査で訪れるヨーロッパでは、農家はもちろん、一般家庭でもしばしば糸車や糸取り棒などが家具や装飾品として取りおかれ、ほんの少し前までそのような作業が身近にあったことが感じさせられる。ひるがえって日本では今日、織りの文化に触れる機会などほとんどない。9月には特展「世界の織機と織物」が開幕する。どこかに忘れてきた織りの文化へいざなう糸口になればと思う。

(庄司博史)

●表紙：タテ糸にヨコ糸をらせん状に組み合わせることによって織られた管状の織物のモデル。織りあがりのかたちはホースやチューブのように中空となる。

次号の予告

特集

記憶をつなぐ 津波災害と文化遺産(仮)

月刊みんなく 2012年8月号

第36巻第8号通巻第419号 2012年8月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

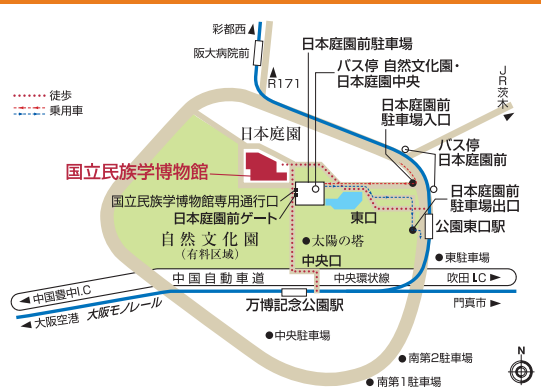
発行人 八杉桂穂
編集委員 庄司博史(編集長) 小川さやか 樫永真佐夫
久保正敏 菅瀬晶子 山中由里子

編集アドバイザー 山内直樹
デザイン 宮谷一敦
制作・協力 財団法人 千里文化財団
印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北七大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。)
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてできます。



みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

